

國史の特質と國民道德の發達

(大正九年十月三十日教育勅語降下三十年記念式講演)

川 島 元 次 郎

本日教育勅語降下三十年記念式典に當りまして、國民道德に關する講演を致しまするは、不肖の深く光榮とする所であります。謹で教育勅語を奉誦致しまするに、先づ「我皇祖皇宗國を肇むること宏遠に徳を樹つること深厚なり」と詔らせ給ひ、我が建國の宏謨を説き、列聖相承け仁政を行はせられ、國民を愛撫し給へることを詔らせ給ふてある、次に「我臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは是れ我國體の精華にして教育の淵源亦實に茲に存す」と詔らせ給ひ、我等の祖先が君國に忠節を盡し、父母祖宗に孝道を全うし、協力一致して國體の精華を作り上げたることを詔らせ給ふてある、而して國民道德の綱目を列舉し給ひ、「斯くの如きは獨り朕が忠良の臣民たるのみならず又以て爾祖先の遺風を顯彰するに足らん」とて我等の祖先の遺徳を稱揚し給ひ、進で「斯の道は

實に我皇祖皇宗の遺訓にして子孫臣民の俱に遵守すべき所、之を古今に通じて謬らず之を中外に施して乖らずと詔らせ給ひ、醇美なる我國俗の成るや一朝一夕の故に非ず、國民道德の發達完成は皇祖皇宗の遺訓と國民の祖先の努力と相頼り相俟て結成したるものなることを宣明し給ふてある。是に於て教育勅語の御趣旨を十分に理解しやうとするには、過去に於ける國民道德發達の經路を明かにし、國民の祖先の道德觀念、思想、社會組織、日常生活の行動等に就き明確なる知識を要するのである、換言すれば我國史に通曉する事を要するのである。

熟々考察致しまするに、斯くの如き醇美なる國俗を完成し、國民道德の發達を促進致しました所の我國史には、世界の他の國の國史に比して傑出した所の特別なる性質、特色といふものがなければならぬ、若し之れなしとするならば、我國史は世界の他の國史と同一の要素を有するのであつて、従て我國民だけが特別に醇美なる國俗を有するといふことが出来ない道理である。此の國史の特質といふことが如何に國民道德の發達を促進したかといふことを闡明するのが此の講演の主意とする所であります。

先づ用語の意味を明かにする必要がある、國史といふのは一國家一國民の歴

史であつて、英語の national history にあたり、萬國史又は世界史 international history, universal history に對する言葉である、それ故に支那には支那の國史があり、英國には英國の國史がある、我が國の國史といふ場合には日本國史といふが正當であるけれども、略して單に國史といへば日本國史を指すのである、それは丁度、國語といへば日本國語を指すのと同様である。さて國史の特質として擧ぐべき第一は單一・unity といふことである、言ふ迄もなく我が國民は種々なる民族の集合であつて、決して單純なる一民族でないのである、太古此の國土に先住したる民族はアイノ種族であつて、我國家成立の後それが我々の祖先の種族に降服して居る、それから朝鮮支那其他の大陸地方と交通が頻繁であつて、それ等の種族が我國に歸化したことは歷代其跡を絶たないのである、十六世紀の中葉以後歐洲人の我國に來航するに及び、葡萄牙人、西班牙人、英國人、和蘭人等の歸化するものも尠くなかつた、而して明治大正の聖世に當りて我國境の擴大するに伴ひ、臺灣朝鮮樺太の土人に至る迄我國民に包括するに至つたのであるから、日本國民といへば頗る複雑なる民族的集團であるといはねばならぬ、けれども此の國民の有する歴史は上下三千年を通じて一貫する所の中心點があつて、あらゆる國民

的事象、社會的出來事は此の中心點に統一せられ渾然として一塊をなして居る、建國の初より今日に至る迄我國史は連綿として此の中心點に沿ふて繼續し來れるのであつて、他の國の國史のやうに中心點が途中で斷絶し、歴史的事實の前後の關係が屢々斷絶するが如きものと同日の論でないのである、例を支那に取ると、今日は中華民國であるが、中華民國の國史といふものは革命の時から始まつて居る、その以前には中華民國は存在しないのであるから、國史の發端をそれ以前に持つて行くことは出來ない、それ以前は清國である、清朝の康熙帝は英明の君主であつて、其の前代明朝の修史事業にも大に力を竭されたのであるが、今若し中華民國の學者が康熙帝の遺風を欣慕し、清朝の歴史を大成するとしてもそれは愛親覺羅氏の發祥より筆を起して、中華民國の成立の時に至て筆を擱かねばならぬと思ふ、そこで支那では從來其の統治者の系統が代はる毎に、所謂國命を更ふる毎に其の前代の修史事業をやるのであるが、多くの場合に於て新に興つたものが其の滅びたるものゝ歴史を編纂するのであるから、新に興つた方の事實を揚げ、其の滅びたるものゝ事實を貶する嫌ひがある、少くとも支那の歴史を通觀するには此の注意を有することが必要である、そこで斯様にして出來

上がつて居る所の支那の國史が、上下を通ずる所の中心點を缺如して居ることは明かであつて、歴史的事實の前後の關係が全く脈絡を絶たれて居る、一言以て言へば支那の國史は多くの單位から成立つて居る、世界の多くの他の國の國史は殆ど凡てが支那の國史と同様である、之に反して我國史には建國以來三千年を通ずる所の中心點が嚴然として存在して居り、國史の性質は全く一單位である、神代の傳説は直に人皇の時代に連續して居る、奈良朝、平安朝、鎌倉時代、室町時代などと云ふが、それは政治の中心點が奈良なり、京都なり、鎌倉なりにあつた時代を劃して名づけたのであつて、時代即ち時の分割である、時代は推移して行くのであるが歴史的事實の前後の關係は脈々として連續して居るのである、それ故に各時代の歴史を合せて一つにすれば即ち大古より今に至る渾然たる一大冊をなして完全なる國史となるのであつて、幾何學の公理の如く各部分の統和が完全なる全體である、即ち唯一つの單位より成立つものであることが明かになるのである。我國史に何故にかゝる特質があるかといふに、それは我國家の起源即ち建國の體制が此の特質を形成するに與りて多大の力があると思ふのである、國家の起源に就きまして倫敦大學の倫理學の教授 Carveth Read 氏が述

べて居ることは要領を得て居るから紹介致しますと、此の人は今日六十歳前後の老大家でありますが、一九〇九年に於て自然的及社會的道德 (Natural and Social Morals) といふ著書を公にした、其の第二卷の第八章に於て國家が道德に及ぼす影響 (influence of the state on morals) と題して論述して居ります、其の中に國家の起源に就ては種々の説があるが之に關して確實なることは知り得ない、何となれば其の歴史的記錄は遺つて居らぬ、又諸國の境遇が違ふから一つの説を以て凡ての國家が斯ういふ風に起つた、それ以外に國家の起る方法はないといふが如き説明は到底出來ない、要するに諸説は何れも臆説に過ぎぬ、併し確かなることは判らぬにしても道德に大なる影響はないと思ふ、國家の起源に就て今日學者の採用して居る有力なる説が二つある、其の一は家長説であつて家族が集合し段々發達して國家といふものになつたと見る説である、此の臆説に依れば其の集合したる家族中の一つが勢力を得、其の家族の家長が集合したる家族全體を一族として指導することに由て國家が起るのであると考へる、此の説に依れば國家は一家族の擴大されたものと見るのである、今一つの國家の起源に關する臆説は、種々の獨立の家族が狩獵の目的の爲とか又は其の狩獵地

の防禦及占有の爲の戰爭の爲とかで集合して共同生活をする、さうなつて來ると凡ての事に於て何人か其の指導者になつて全體を指揮して行く必要が起る、困難なる事が起つた時には其の指揮者が全體を統率するといふ必要が起る、さうして國家が起るのであると考へるのである、要するに國家の起源に關して此等の二説がある而して何れが多く、國家の起源であるかといへば勿論第二の方であらうと思ふ。一家族が段々大きくなつて國家になつたといふ實例は極めて少數であつて、多數の國家は有力なる人が種々の種族を統一して成立したと思はれる、少くとも之に由て國家が段々膨脹發達して來たことは、歴史上の事實であると説いて居る。此の國家の起源に關する Carveth Read の説明は十六七世紀の頃に唱導せられた所の國家は國民の契約に由て起つたといふ説に比較すると餘程事實に近いと思ふのである。我國の國家の起源に關しては古い傳説があつて、それが奈良朝即ち八世紀の初に於て記録として編述せられて居る、即ち古事記及日本書紀である、此の記紀の二書を研究して吾々は上古の社會組織が氏族制度——氏骨の制度であつたことを知り、氏の上即ち氏族の家が、氏人即ち氏族の人々を統率して多數の氏族の本宗たる氏族の氏の上に隸屬して、

整然たる秩序を維持して居たことを知ることが出来る、此の多數氏族の本宗たる氏族の家長が統治者として此の國家に君臨せらるゝのであつて、Carveth Read氏の云ふが如く一家族から膨脹發達し來つた國家であるといふことは明白である。此の國家の起源即ち建國の體制が他の國家と異なる所であつて、我が國民が世界に對して自負する所であるのである、從て天照大神が天孫瓊々杵尊を此の國に降し給ふに當り、爾皇孫往而治、寶祚之隆富與天壤無窮と宣ひし宏遠雄大の理想は世々實現せられて、三千年を通じて一貫する中心思想となつたのである。是れ我が國史に單一といふ特質の存在する所以である。

我が國史の特質として擧ぐべき第二は進化・evolutionといふことである、凡て生物界に於て進化の理法が存在するといふことは Darwin 以來生物學者の確認する所であつて今日之に對して疑を挾むものはないのである。所が此の生物の進化といふ事は生物の一個々々の個體に就て進化の理法が存在するといふのであつて生物の社會的生活に於ては進化の理法が存在することを認むることが出来ぬ、其の之を認むることが出来るのは獨り人類の社會的生活に於てのみ認識することが出来るのである、社會的生活の進化といふことが存在するに

よりて、吾人人類は他の動物と全く異りて居るのである、動物界の進化としては唯生存競争、自然淘汰に依りて生じ来る進化、即ち個體間の競争の結果として生じ来る所の進化が存在するのみであつて、社會其者は常に同一である、即ち前時代に於ける動物の社會と今時代に於ける動物の社會との間に社會として何等の進化をも認められないのである、人類に於ては之と全く異りて居り、人類社會其者に進化を認めることが出来るのである、故に社會としての進化といふことは人類社會の特徴であつて、如何なる民族の間にも如何なる國民の間にも於ても、苟も社會的生活を營む以上は進化の存在せざることはなき筈である。然るに社會の進化といふことゝ國家若くは國民の進化といふことは同一の概念でない、社會の進化が存在するに依りて國家若くは國民は必ず進化すべきものであるとは限らぬのである、社會は進化しつゝありても國家は衰滅する時がある、國民は衰殘の餘、萎縮退嬰することがあるのである。故に一國の國史の性質として進化といふことを認め得ない、反對に退化 degeneration をいふことを認めねばならないやうな實例があるのである、勿論此の場合に於ても其の國家若くは國民の社會生活には進化といふことが存在することを忘れてはならぬ。例を支

那に取ると支那の國史に於ては進化といふ性質を認めることが出來ぬ、何故なれば支那の國史に於ては國民活動の理想が過去の時代に在りて存する、堯舜の時代は支那國史に於ける理想の時代であつて、歴代の君王を始め政治家經世家は先王の治績に倣ふといふことが其の理想とする所である、學者思想家は先秦時代の學者思想家の遺したる典籍の訓詁をなすを畢生の事業として周公孔子の壘を摩するを以て能事了れりとして居るのである、偶々歐米の新思想に促されて文化運動などに奔走し、ラッセルなどを招聘し來るものがあれば、支那は古代の文化を紹述すればよい、支那國有の文化を如何にせんとするかとラッセルの一喝に遭うて啞然として答ふる能はざる状態ではないか。吾人は我が親善なる支那國に取りて其の國史の性質として不幸にして進化といふことを認むる能はざるを遺憾とするものである。其の他古代に於て文化の高度に達したる諸國、埃及とか印度とかの國史を見れば同一の例を頻々として見出すのである、埃及には當時の文化の遺物として宏大なるピラミットが残つて居る、ピラミットの中には國王の屍體が木伊乃となつて保存されて居る、それで埃及の國史は國史其者が木伊乃となつて居るといはるゝは知言であるといはねばならぬ。

斯くの如く他國の國史には進化を認め得ないのみならず、反對に退化を認めねばならない實例が多きに拘らず、我が國史に於ては三千年を通じて進化の跡が脈々として絶えざるは誠に難有きことである、殊に最近六十年間に於ける我が國勢の進歩發展は世界の驚異であつて、其の原因が那邊に存するかを確かめん爲、歐米の學者は相當に苦心を拂つたものである、さうして或る種の學者は之を一の奇蹟として觀察し、日本國民に對して一種の敬畏と恐怖とを抱いて居るのであるが、斯くの如き異常の進歩發展をなすべき要因素質が我が國史の特質に具備して居ることを想起するならば、此の進歩發展が一日の故にあらざることゝを容易に理解し得るであらう。

國史の特質の第三として擧ぐべきことは同化[◎] assimilation といふことである、前に既に述べたるが如く、我が國民は決して單純なる一民族の集團ではない、複雑なる關係に混淆したる所の數多の種族の集合である、所が異種の諸種族は其の中堅となる所の大和民族——天孫種族に同化して異種族の特色を失つて居る、勿論之は相當の時間を要することであつて直に同化作用が完成するのではない、從て今日朝鮮とか臺灣とか所謂新附の民が大和民族に同化されて居ると

いふことは未だ確認するには至らないが、相當の年所を経れば此等が同化されて渾然たる一體をなすに至ることは信じて疑はざる所である。嘗に國民として包含する所の異種族を同化するのみならず、他の國民の有する所の文化を攝取し、之を固有の文化に同化するといふことが我が國史の特質として顯著なる事實である、文學なり、美術なり、工藝なり、あらゆる文化を他國民より攝取し、其の文化の表現する思想、其者をも採取して我が國固有の文化、思想、信念に同化する、此の同化作用が盛であるが故にそこに不斷の進化が行はるゝのである、進化と同化とは相俟つて國運の發展を助けて居るのである。進化論者の説に依ると動物の發生學上次のことが論證される、一の單細胞動物を取りて之を一の硝子の容器の水中に入れ、餌、日光、水の溫度等其の繁殖上十分に注意して檢するに、此の單細胞動物は盛に繁殖する、即ち細胞の核が先づ分裂して二つとなり、それから細胞の體にくびれが出來、終には細胞體が全く二つに分れて異りたる方向に遊ぶやうになる、二十五分乃至三十分で一たび分裂をやる、分裂した新細胞は浮遊する間に餌を取り、段々大きくなりて初めと同じ大きさに達すれば又分裂を初める、さうして段々分裂をして百五十回乃至五百回も分裂をやる、即ち幾何級

數的に其の數が増加するのである、所が此の分裂の代が重なるに従ひ元の如く十分に發育せず、其大きさが四分の一となり五分の一となり段々衰へて終には全く斃死して了ふのである、通常二百回以上も分裂をやると餌日光溫度は如何に十分であつても自分の方で弱り全く死んで了ふのである、所がそれが別の先祖から分れたものと入れ混せると二つの細胞は相合して其の物質を混淆する、さうすると又勢を回復して活潑に分裂するのである、之を接合 conjugation といふ、甲の先祖から分れた所の細胞が乙の先祖から分れた所の細胞と相接し、細胞の外壁の養を取る所から他の細胞の原形質を相融合し、中の核を取り代へる、さうすると全く離れて生活力を増大するのである、此の事實は實驗によりて直に證明することが出来るのである。此の單細胞動物の接合に依りて新しき生活力を得るといふ事實は進化といふことに關して何を暗示するのであるか、いふ迄もなく國民の文化といふことも同様の理法に支配せらるゝのであつて、同一祖先の文化はそれ自體に發達進化するにしても世代を経るに従ひ、其の活力を衰耗するのであつて、終に沈滞退化を免れない。然るに他國民の文化、祖先を異にする所の文化に接觸して之を同化するときには此處に新たなる活力を得て一段

の進化發展をなすのである、これは埃及なり印度なりの文化の歴史が之を證明することである。我が國に於ては早くより支那朝鮮の文化を輸入して之を同化した、奈良朝の文化は即ち此の大陸文化を同化したる精華に外ならぬのである、文學、美術、工藝などを通じて輸入せられたる所の根本思想、之が又我が國民固有の思想に渾然として融合せられて居る。最も早い時代に於ては先づ儒教の思想が輸入されて居る、これは應神天皇の御代即ち三世紀の末のことであつて、我が國民固有の思想、道德觀念に一致契合する點が多かつたから殆んど何等の波瀾を捲き起すことなく融合して了つた。尋で輸入せられたのが佛教の思想、印度に發生して中央亞細亞を経て支那に入り、其の經典は支那文を以て翻譯せられたる所の平等思想、靈魂輪廻の思想、現世を假の世界とし來世を眞の靈的生活なりとする所の思想が朝鮮より輸入せられたることであつて、此のことは欽明天皇の御代即ち六世紀の半であつたが、此の新思想は我が固有の思想、敬神崇祖の思想、氏族制度の下に社會の秩序を維持せる差別思想、現世を眞の實在として之に安息せる思想に對し激烈なる衝動を與へたのであつた、そこで國粹派と新思想との激烈なる論争があつて終に干戈に訴へて兩派の運命を賭すること、

になり、國粹派の物部氏は新思想派の蘇我氏の爲に滅されて新思想派は一時其の勢力を専らにした、此の間に新思想は國民の間に宣傳せられて盛に傳播したのであつたが、國粹派の中臣氏は英邁なる中大兄皇子を擁して終に蘇我氏を討滅し、大化改新の大業を成就したのであつて、改新の制度を按ずるに八省百官の首位に神祇官を置き敬神崇祖の固有の思想を保護獎勵すると同時に、氏族制度を廢し氏の上が私有したる氏人部曲の民を公民とし、其の私領したる土地を收公して公地とし、班田收授の法を定めて大に平等思想を採用し社會政策を實行せられたのである、さうして佛教に對しては何等の拘束制限を加へられなかつたのみならず、公平に之を保護せられたるを以て新思想は愈盛に宣傳せられた。さうして行基とか空海とかの傑出したる僧侶は佛教の根本思想がさうしても我が國民固有の思想に融合せざる點あるを思ひ、苦心慘憺の末本地垂迹説を唱ふるに至つた、本地垂迹とは佛陀は神明の本地にして神明は佛陀の垂迹なりといふことである、天竺の佛陀が本地であつてそれが本朝に垂迹して神明となつたといふのである、此の説明は随分無理な點があつて、佛典を研究する者は其の説明の缺陷を容易に見出し得るのであるが、單純なる思想を有する所の一般國

民に取りてはこれは誠に有力なる宣傳の方法でなければならぬ。そこで奈良朝を経て平安朝に至りては佛教の思想は我が固有の思想に渾然として融合し、神明佛陀相並んで現世と來世とを加護し給ふといふことになつて來た。斯くの如く佛教の輸入に依りて新舊思想の衝突といふことは可なり長い間に涉りて繼續したのであつたが、それが終に固有の思想に同化されて了つたのである。此の佛教の思想と衝突のある間に一方に於ては支那より道教の思想が輸入せられた、これは老子の學說に基くのであつて、老子の學說は黃帝より出づるといふので、黃老の學と稱せらるゝが、其の學說の根柢は自然虛無に存する、道は自然に存し人爲を借るべきでない、仁義は道の廢せるなり、禮樂は徳の薄きなり、虛靜無爲之を玄徳といふ、虛靜の極萬物自ら化す、是れ無爲にして爲さざるなき也といふに在る、其の本旨は元より心を治むるにあるのであるが、此の自然を貴び虛無を宗とするといふ思想は煩瑣なる禮樂に飽き、社會的生活の煩累を咀ふものに取りては誠に空谷の跫音であつて、方士の徒は此の人情の弱點に乗じて老子の學說を強解し、老子を祖述すると稱して道教の一派を樹立したのである、さうして神仙の術といふものが之より起り、不老不死を求むるといふ欲求となり、清

談といふことが流行して一切の世間的努力を放擲して俗界を超越した所の清談に耽るといふ風が行はれた、此の思想が我國に輸入されたのであるが、神仙の術は可なりの影響を及ぼして居るが、清談の方は國民思想の上に大なる影響を及ぼさなかつた、若し之が流行するといふことになれば國民の經濟的活動は熄止し産業は荒廢に歸する次第であるが、幸にして思想界には波瀾を捲き起すに至らずして固有の思想に同化されて了つたのである。所が十六世紀の半に當りて歐洲人が我國に渡來するに及び、耶蘇教の思想が同時に我國に輸入せられた、耶蘇教は十六世紀の初に於てマルチン、ルーテルが羅馬加特力に對して反旗を擧げ宗教改革の運動を起してより、新教は北部歐洲を風靡し羅馬教の地盤を根柢より覆したから加特力の勢力昔日の如くならず、イニアデオ、デ、ロヨラは此の頽勢を挽回せんと欲し、一五四〇年エスिता教團を組織し獻身的殉教の志操あるものを選抜して盛に加特力の布教に努め、北部歐洲に失ひたる地盤を東洋方面に於て回復せんとした、それで我國に入り來つた伴天連即ちバードレは此のエスिता教團に屬する宣教師であつて、獻身殉教の精神を以て熱烈なる布教宣傳をやつたのである。此の耶蘇教の思想は我が固有の思想に大なる衝突を

與へなかつた、其の平等思想、博愛思想は固有の思想に共鳴する所があつて、到る處好感を以て迎へられたのである。併しながら此のエスイタ教團の獻身殉教の精神を以て熱烈なる布教を試むる運動の背後には政治的野心が包藏せられてあると認められた、本國政府の新大陸及南洋諸島に於ける侵略的政策は常に先づ耶蘇教の布教を以て土民を懷柔し、然る後武力を以て之を掩有するに在ることが立證せられた、土佐沖に於て難破した所の西班牙船の船員中此の事を告白したものがあつた、拘禁せられた所の伴天連中、日本に於て切支丹宗門に傾く者過半有之は即刻注進すべし、軍船數多可被越と記したる本國政府の密書を携帶せるものがあつた、種々なる證據によりて我が幕府當路者は耶蘇教の宣布を禁止するは、金甌無缺の國體を維持するに必要にして已むを得ざる事體なりとし、斷然禁壓の方針を取つたのであつて、其の茲に至つたのは耶蘇教の思想、其の者の爲ではなく、布教運動の背後に包藏せられたる侵略的政策、其の者の爲であつたのである。それであるから開國の國是を取るに當りては安寧秩序を妨げざる限り信教の自由を認めることになつたのであつて、今日に於ては耶蘇教の思想も殆んど全く國民固有の思想に同化されて居る。斯くの如く同化作用の強

大なるは我が國史の特質であつて、接觸し來るあらゆる文化を攝取し、輸入し來る所のあらゆる思想を採取し、之を洗鍊し、陶冶し、其の長を取り粹を抜き以て我が固有の思想に同化し、其の活力を養ひ來つたのである。此の同化の完了するには相當の時間を要すること前に述べた通りであつて、其の過渡の時期に於ては衝突争闘を免れないのである、それが即ち外來思想を其の儘に取らず、之を洗鍊し、之を鍛冶し、以て我が固有の思想に同化する所以であつて、決して怪むに足らないのである。今や歐洲の大戦終を告げ世界の大勢大に變轉したる時期に當り、種々なる思想の我が國に輸入せらるゝは當然の歸趨であつて、亦怪むに足らないのである、さうして此等の思想に對し衝突も起れば争闘も起る、けれども或る時期を經過すれば、それが我が固有の思想に依りて洗鍊せられ、鍛冶せられ、淘汰せられ、砥礪せられて終には固有の思想に同化せられたことは明白であつて、終局に於て我が國民の思想界に残る所のもはマルクスでもない、レニンでもない、勿論クロボトキンでもない、ラッセルでもない、其等の思想を概括し抽象した所のものから更に洗鍊陶冶を経たところのものでなければならぬ。

私は我が國史の特質として單一、進化、同化の三つの性質を挙げたのである、此

等の性質の一つ或は二つを有する所の國史は、他國の國史に於ても見ることが出来るが、三つの性質を具有するといふことになりては我が國史の特色であつて他國の國史に超越せる點であるのである。我が國民道德は此の國史の特質によつて建國以來三千年間に培養され來つたものであつて、決して一朝一夕に出來上がったものでないことが自ら明かになつたと思ふ、教育勅語は此の國民道德の基準を明示し給うたものであつて、三千年來我が國民上下の協力一致して實踐躬行し來つた所のものである、さうして勅語に示し給つた國民道德の基準は之を古今に通じて謬らず之を中外に施して乖らざるものであるが、此の基準から岐れ出る所の細目、實踐躬行の手段方法に至りては時を追うて進化發達すべきものであつて、決して一定不變のものでない、吾々現代の國民が之を實踐躬行して次の時代の國民に傳へる、次の時代の國民は吾々の實踐躬行の方法を其の儘踏襲するに限らない、之に進化發展を加へて又其の次の時代の國民に遺すべきものであつて、斯くの如くして國民道德の基準は一定不變であるけれども、其の實行の細目は刻々に進化發達すべきものである、丁度我が國史の特質單一といふことを中心となる所の一點は一定不變であるけれども、歴史事實は刻

々に進展し、進化の跡歴々たるが如きであると思ふ、故に現代國民は國民道德の基準を遵守し、舊に前代の國民より受つぎたる實踐躬行の方法を恪守するのみならず、進んで之に進化發展の跡を印し以て後代の國民に傳ふる心掛が必要であると思ふ、是れ實に吾等が前代の國民に報ゆる所以であつて、而して後代の國民に對して負ふ所の責務であると思へるのであります。